

る。同時に、インドネシア語の定員を二名減、ベトナム語の定員を二名増とする課程内での定員調整も行い、インドネシア語一八名、マレーシア語一〇名、フィリピン語一五名、タイ語一五名、ラオス語一〇名、ベトナム語一二名、カンボジア語一〇名、ビルマ語一〇名、とする予定である。

### 三 卒業者および教官

#### 一 東南アジア課程卒業者数一覧

次に東南アジア課程卒業者数一覧を掲げる。「東京外国語大学同窓会名簿」(一九九四年版、東京外語会)とその後の卒業生名簿に基づいて作成した。

#### インドネシア語専攻

日露戦争(一九〇四—〇五年)から三年目、一九〇八(明治四十一年)年、東京外国語学校東洋語速成科馬來語学科が開設される。これによって、インドネシア語・マレーシア語が東南アジア課程の中では最も長い歴史を持つこととなる。この速成科は廃止されるまでの三年間に二二名の卒業生を送り出した。一九一一(明治四十四)年、馬來語科は本科に昇格する。日韓併合の翌年である。

速成科馬來語学科以来の専任教官は以下の通りである。

村上直次郎(一九一一—一八、東京外国語学校校長 一九〇八—一八)、藤田季荘(一九〇八—〇九)、佐和山彌六(一九一六—一八)、上原訓蔵(一九一九—二四)、朝倉純孝(一九一九—五三、名誉教授)、高田成義(一九二〇)、

東南アジア課程卒業生数内訳

		In	Ma	Ph	T	L	V	Ca	B	
1908	M41									
1909	M42	16								
1910	M43	2								
1911	M44	4								
1912	M45	1								
1913	T2									
1914	T3	10			4					
1915	T4									
1916	T5	5			4					
1917	T6									
1918	T7	10								
1919	T8									
1920	T9	14								
1921	T10									
1922	T11	10								
1923	T12	14								
1924	T13									
1925	T14	7								
1926	T15	16								
1927	S2									
1928	S3	9								
1929	S4	12								
1930	S5									
1931	S6									
1932	S7	11								
1933	S8									
1934	S9	16								
1935	S10									
1936	S11	16								
1937	S12									
1938	S13	19								
1939	S14									
1940	S15	16								
1941	S16	17								
1942	S17									
1943	S18	14								
1944	S19	1			18					
1945	S20	11			11					
1946	S21	5			21					
1947	S22	8			23					
1948	S23	17		15	29					
1949	S24	12		10	10					
1950	S25	7		7	9					
1951	S26	16		16	12					
1952	S27									
1953	S28	12			15					

(続き)

		In	Ma	Ph	T	L	V	Ca	B		
1954	S29	10			10						
1955	S30	4			3						
1956	S31	8			8						
1957	S32	10			8						
1958	S33	13			11						
1959	S34	11			11						
1960	S35	18			17						
1961	S36	16			9						
1962	S37	21			23						
1963	S38	16			15						
1964	S39	12			16						
1965	S40	21			24						
1966	S41	14			17						
1967	S42	23			19						
1968	S43	14			11		5				
1969	S44	18			15		5				
1970	S45	11			5		8				
1971	S46	19			10		7				
1972	S47	17			20		5				
1973	S48	26			9		4				
1974	S49	15			10		4				
1975	S50	14			13		4				
1976	S51	23			10		7				
1977	S52	19			11		11				
1978	S53	20			12		8				
1979	S54	18			6		5				
1980	S55	19			8		7				
1981	S56	13			16		8				
1982	S57	22			8		8				
1983	S58	18			12		8				
1984	S59	17			11		11				
1985	S60	19			11		7		3		
1986	S61	20			23		4		7		
1987	S62	17			17		3		7		
1988	S63	22	7		10		8		8		
1989	H1	15	5		15		9		6		
1990	H2	22	8		10		12		10		
1991	H3	26	10		16		10		13		
1992	H4	17	10		13		8		13		
1993	H5	21	11		17		18		18		
1994	H6	15	7		17		10		12		
1995	H7	18	19		13		10		11		
1996	H8	21	16	3	20	1	15		2	7	
1997	H9	20	17	13	18	2	12		3	14	
1998	H10	18	8	16	24	3	20		11	12	
	#†	1099	118	80	758	6	261		16	141	2479

岡田丈夫（一九二六―三〇）、鳥居御嶽（一九三〇―三五）、齒田顕家（一九三二―五五）、渋沢元則（一九五〇―八一、名譽教授）、伊東定典（一九五五―八一、名譽教授）、佐々木重次（一九六二―）、佐藤弘幸（一九八一―）、佐久間徹（一九八一―八六）、石井和子（一九八六一―）、小野沢純（一九八四―）、正保勇（一九九〇―）。

このうち、村上、佐和山、朝倉、渋沢、佐藤がオランダ語・オランダ事情（東京外国語学校「当該国語及び当該国語」以来の伝統的用語）の担当。上原、高田、岡田、鳥居、齒田、伊東、佐々木、佐久間、石井がインドネシア語（馬來語・マライ語・インドネシア語）・インドネシア事情。小野沢、正保がマレーシア語・マレーシア事情の担当である。

歴代の専任外国人教師を以下に列記する。最初期の外国人教師はマレー出身者であった。すなわち、イブラヒム・ビン・アフマッド（一九一一）、アフマッド・ビン・アンバック（一九一三）、バッチ・ビン・ワンチック（一九一四―二〇）、イブラヒム・ビン・パチャー（一九二二―二四）、アブドゥル・ラニ（一九二五―三三）。そしてこの後にジャワ出身者のW・S・プルワダルミンタ（一九三三―三七）、R・スジョノ（一九三八―四二）、ウマルヤディ・ルミンタ（一九四二―五〇）が続く。このことを思うと、一九八四（昭和五十九）年の「マレーシア語学文学」講座開設は、新設というより、実は一九三二年をもって途切れたマレー語の半世紀ぶりの復活と言った方が正確である。なお、W・S・プルワダルミンタは、戦後のインドネシアを代表する辞書『Kamus Umum Bahasa Indonesia』の編者ブルワダルミンタその人である。

インドネシア語は一九五〇（昭和二十五）年より専任外国人教師を失い、ウマルモヨ（一九五三―五七）、ラデン・バグス・スマントリ（一九五九―五八）、メック・スナルノ（一九五九―六二）、モハマッド・アルシャッド・ノール（一九六三―六六）の非常勤講師に頼るのみという時代が続いた。再び待望の専任を迎えることが出来たのは、



菫田顕家

ヤマダ大学文学部から迎えている。付言すれば、前記のサストラネガラは広島高等師範、ズビール・アスリ氏は陸軍士官学校で学んだかつての南方特別留学生だった。

一九七〇年代以降の非常勤講師は、ザイヌディン・ダエン・パタンガ（一九七三―七六）、トルヤノ・AS（一九七六―）、スマルト（一九八五―八六）、ジョンジョン・ジョハナ（一九八六―八七）、ドミニック・パタオネ（一九八九―九四）である。

非常勤講師を迎えて多彩な講義が開講され始めたのは、一九六〇年代に入ってからと言ってよい。以来現在まで出講した非常勤講師は、永積昭（歴史）、西川五郎（熱帯農業）、馬淵東一（社会人類学）、岸幸一（現代史）、増井正（語学）、鈴木長年（経済発展）、丹羽元一（語学）、石井和子（語学）、萩原宣之（比較政治）、小嶋敏宏（語学）、奥源造（現代史）、滝川勉（土地制度）、鈴木敬蔵（金融為替）、青木俊男（経済法）、安中章夫（歴史）、土屋健治（歴

一九六七（昭和四十二年）、アナス・マルク（一九六七―七〇）からであった。以来、ムスカルナ・サストラネガラ（一九七〇―七五）、モハメッド・ズビル・アスリ（一九七五―七八）、アナス・マスリ（一九七八―七九）、スウディ・ルックン・ハサン（一九八〇―八三）、ウイン・カルジョ（一九八三―九〇）、ストラトノ（一九九〇―九三）、ラムリ・レマン・スモウイダグド（一九九三―九六）、イムラン・T・アブドゥラ（一九九六一）。最近の三名はいずれも交流協定を結んでいるガジ

史)、後藤乾一(歴史)、正保勇(言語学)、大木昌(歴史)、山下勝男(語学)、間亭谷栄(社会学)、有吉巖(歴史)、内藤能房(経済史)、長井二千代(語学)、倉田勇(文化人類学)、牛江清名(語学)、鍵谷明子(文化人類学)、野村昇(語学)、鈴木佑司(政治)、城田実(語学)、加納啓良(農村経済)、押川典昭(文学)、宮崎恒二(文化人類学)、石井健(語学)、藤田泰伸(農村経済)、村井吉敬(社会)、森山幹弘(スング語)、伊東照司(美術)、水野広祐(経済)、大形里美(語学)、三平則夫(経済)、加藤剛(政治)、内藤耕(コミュニケーション論)、金光男(社会)、の各氏である。

非常勤講師として出講した期間は、土屋健治のわずか一年(一九七三年)から、鈴木長年の計三〇年まで千差万別ながら、それぞれに多大な影響を受講の学生諸君に与えた。

#### マレーシア語専攻

一九八四(昭和五十九)年、小野沢純を専任教官に迎えてマレーシア講座がスタートした。一九八二年からマハテイル新政権が「ルック・イースト政策」を導入するなど、日本・マレーシア両国の関係緊密化という時代に応えるインドネシア語学科の改組として実現したものである。歴史的に見れば、かつての馬來語の「半世紀ぶりの復活」であることはすでに述べた。この改組以前にインドネシア語学科で開設されていたマレーシア関係の講義を担当した非常勤講師は、田中和夫(一九七五―七七)、小野沢純(一九七八―八二)の二名であった。

スタート当時の専任教官は小野沢純のみであった。正保勇が加わったのは一九九〇(平成二年)年。そして一九九七年、開設一三年にしてやっと悲願の専任外国人教官を迎えることができた。一九九六年に学術交流協定を結んだマレ

ーシア国立言語・図書研究所のアンウル・リドワン（一九九七）である。

この間、多数のマレー人非常勤講師の支援を受けた。アブドウル・アジズ・ビン・マスタムに始まり、ハニファ・マリアティ・モハメッド、ラティファ・イスマイル、アブドウル・アジズ・ビン・ハジ・アルシャッド、アドナン・ビン・Mdサレー、ハジ・Abハリム・Abラーマン、ワン・モハマッド・ザクルディン・ビン・ハジ・ワン・マーモッド、サハルディン・ハジ・イスマイル、モハマッド・ザイディ・ビン・ザカリヤ、ジャリル・カリッド、ドラ・アリ、スマン・アフマッド、ワルティ・キミ、イスマイル・プユン、モハマッド・タジュディン・ビン・ドン、ノール・アルフダ・ビンティ・アブドウル・カリム、ワン・ハナフィ・ビン・ワン・マツト、Mhザキ・ディン、Mhナスルディン・ビン・Mhアヒ、Abラヒム・Mhノール、アフマッド・ザキ・アンソレ、ノール・ザリ・ビン・ハマツト、イスハック・Mhナスリ、バハルディン・モハマッド、フアリダ・モハマッドの総勢二五名である。マレーシアの国家公務員として大学院に留学中の方に依頼することが多く、そのため交代が頻繁にならざるを得なかった。

開設以来の非常勤講師には、森元繁（語学）、堀井健三（農村経済）、生田滋（歴史）、原不二夫（華人社会論）、木村陸男（政治）、黒柳米司（外交）、中原道子（文学）、平戸幹夫（地理）、鈴木佑司（政治）、ヘレン藤本（社会）、野村亨（歴史）、佐藤孝一（政治）、鳥居高（政治）がある。

#### フィリピン語専攻

一九四四（昭和十九）年、東京外事専門学校にフィリピン科が開設された。一九四二（昭和十七）年の日本軍のマニラ占領の二年後である。このフィリピン科は、この開設初年度には学生募集をしていない。そして翌一九四五（昭

### 三 卒業者および教官

和二十)年から学生二〇名を募集し(一九四六年、フィリピン科と改称)、一九四九(昭和二十四)年、東京外国語大学の発足時に廃止されるまでに、四期四八名の卒業生を出している。

「昭和二十年度東京外事専門学校入学志願者心得」は、「募集科及び人員」表上段に第一部として支那科六〇名、蒙古科三〇名、タイ科三〇名、マライ科三〇名、インド科三〇名、イスパニア科三〇名、ポルトガル科二〇名、と印刷されており、そのインド科の脇に並べて、「フィリピン科二〇名(見込)」のゴム印が押されている。如何にも急遽募集を決めた、という体裁である。

ちょうどこの戦後期の資料が大学に欠けているので、当時の卒業生の記したもの(「笠井先生の思い出とタガログ語」昭和二十六年フィリピン語卒小島憲和「追憶 笠井鎮夫先生」笠井鎮先生を偲ぶ会、大学書林、一九九〇年)に従うと、フィリピン科の語学の授業は英語、スペイン語、タガログ語。タガログ語の授業は一年の時は週六時間、二、三年では四時間。最初は笠井鎮夫先生、のちにフィリッピン二世のホームイン・宮崎氏が担当、とある。「タガログ語語彙」(三省堂、一九四四年一月)の著書があるイスパニア科長笠井鎮夫がフィリッピン科長を兼任してタガログ語の授業を担当した。

一九九二(平成四)年開設の東南アジア語学科フィリピン語専攻は、この東京外事専門学校フィリピン科の四十年ぶりの復活ということになる。フィリピン語専攻は一九九六(平成八)年から卒業生を送り出しているが、若い後輩の登場をこの先輩たちが如何に歓喜して迎えたか想像に難くない。

専任教官は、山下美知子(一九九二)、小川英文(一九九四)の二名である。専任外国人教師の獲得がフィリピン語専攻のかかえた今後の重要課題になっている。

開設以来の非常勤講師は、リース・カセル・シュッツ、武井ソコロ、島田ピトウィン・パプロ、イルマ・ペネイラ、

池端雪浦（歴史）、中西徹（経済）、藤原帰一（政治）、結城史隆（文化人類学）、早瀬晋三（歴史）、成家克徳（社会学）の各氏である。

フィリピン国立大学と交流協定を結んでおり、毎年一名の留学生を交換している。

#### タイ語専攻

一九一一年（明治四十四）年、馬來語学科の本科昇格と共に暹羅語科が新設される。タイ語のスタートである。

このように東南アジア課程の中で同じようにもつとも古い両語科であるが、一九一四（大正三）年、暹羅語科四名、馬來語科一〇名の本科一期生卒業後、馬來語科がずっと卒業生を出す一方で、暹羅語科は一九一六（大正五）年に二期生を送り出した後、長い空白期に入るなど、両学科のその後の歩みには対照的なところがある。

タイ語専攻の歴史には次のような時期を示すことができよう。

#### ▽大正初期

一九一四（大正三）年に一期生四名、一九一六（大正五）年に二期生四名を送り出す。ナイ・ピン（一九二二）、ナイ・プー（一九二二）、ブンヤット（一九二二―一五）、これが今知りうる当時の教官である。

#### ▽戦前の長い空白期

東南アジア課程卒業生数一覧を見れば一目瞭然の長い空白期だが、この間、タイ語は廃止されていたというより、学生募集を行わなかったと言うのが正確なようである。



▽戦中―戦後期

七月、第二次近衛内閣「大東亜共栄圏」建設を声明。十二月、日本・タイ攻守同盟という一九四〇（昭和十五年）年、暹羅語部の学生募集が再開された。この年は、馬來語がそれまでほぼ隔年の学生募集から毎年募集になった年でもあった。こうして、一九一六（大正五）年の二期生卒業以来の長い空白に終止符を打って、現在言うタイ語専攻の卒業生が一九四四（昭和十九）年以降、継続的に出るようになった。佐藤致考（一九四一―四五）、山口武（一九四一―四六）、また、レック・メナルチ（一九三七）、プラゴップ・プカマーン（一九三八、一九四一―四二）、マーニツト・パーヤツカンダナ（一九三九）が、今知りうる当時の教官である。

このように学科開設の年から見れば馬來語と同じく古くとも、タイ語の専門学校時代は意外に短い。その卒業生は、大正の二期の他に、この一九四四（昭和十九）年―一九五五（昭和三十）年の外国語学校卒業生三期、外事専門学校卒業生五期のみである。

▽新制大学発足前後から現在

現在のタイ語専攻につながる伝統は、そんなわけでむしろ新しく、一九四五（昭和二十）年の河部利夫着任、新制大学発足翌年の一九五〇（昭和二十五）年の松山納着任という新制大学発足をはさんだ時期から形成されてきたと見てよからう。「大学案内」の「タイ語専攻は、本学が新制大学として発足した当時からすでに開設されていて卒業生も大勢います」（「東京外国語大学 大学案内」一九九〇年）という文言にも、そんな気分が漂う。

この期以降現在に至る専任教官は、河部利夫（一九四五―六五・三）、アジア・アフリカ言語文化研究所 一九六五・四―七七、名誉教授）、松山納（一九五〇―八二、図書館長 一九七四―七六、名誉教授）、中島慰（一九五一―



中島 慰

八六)、田中忠治(一九六九—一九九三、学生部長 一九八二—一九八六・三、名誉教授)、三谷恭之(一九八二)、宇戸清治(一九八六)、小泉順子(一九九三)である。このように、タイ語専攻は現在の三講座制の各講座に属する教官をもっている。

これまでのタイ人非常勤講師は、飯塚ウライ、プラボン・ボディパクテイ、ナリニー、アヌアイ・イサラクーン・ナアユタヤ、チャンティン・ブラッド、プラパンサック・カモンペット、ブルット・ウパツムパノン、ラワン・チョンハ・サワデイクン、ブラサート・チツチワタナボン、タニタ・ターパナワット、ニウエート・ターパナスット、ピチエート・マオラノン、カンチャナー・マオラノン、ワラパン・アリアウイリヤナン、ナターヤ・ヤマカノンである。

専任の外国人教師は、チャンタナー保川(一九七四—一九八一)、ウイチャイ・ピアンヌコチョン(一九八二)である。

日本人非常勤講師は、尾野秀一(語学)、田中忠治(タイ事情)、永積昭(歴史)、王瑜(華僑論)、市川健次郎(低開発国論)、森幹男(文学)、大林太良(民族誌)、青野博昭(政治)、北村甫(ビルマ語学)、河合正子(語学)、坂本恭章(カンボジア語)、斎藤一夫(経済開発論)、桜田郁夫(語学)、伊東昭司(東南アジア美術史)、坂本比奈子(語学)、岩城雄次郎(文学)、村嶋英治(政治)、石沢良昭(歴史)、末広昭(経済)、田中教照(南方仏教)、水野潔(語学)、谷口興二(経済)、池本幸生(経済)、小泉順子(歴史)、重富真一(経済)、山田均(宗教)、飯田順三(比較

法)、原洋之介(経済)、松園祐子(社会)、橋本泰子(家族論)となっている。

一九九〇年からはシーナカリンウイロート大学との間に学術交流協定を結び、同大学の教官を研究生として受け入れる他、毎年、三名程度の交換留学生を派遣し合っている。今後は共同研究などの企画もなされている。

### ラオス語専攻

「大学でラオス語が正規に教えられているのは全国で本学が唯一であり、世界でも旧植民地宗主国フランスなど数えるほどしかありません」(「大学案内」一九九八年)。このラオス語専攻は、一九九二(平成四)年、インドネシア・マレーシア語学科とインドシナ語学科が合併、東南アジア語学科となったときに、フィリピン語、カンボジア語と共に開設され、一九九六年より卒業生を出している。

当初、ラオス語専攻を選んだ者も一年次はタイ語を履修し、二年次からラオス語を履修するという形態をとっていた。一年次からラオス語を履修するように改められたのは、鈴木(旧姓上田)玲子が着任する一九九六年度からである。専任教官は鈴木玲子(一九九六―)、ウティン・ブンニャウォン(一九九八―)。「国立又は公立の大学における外国人教員の任用に関する特別措置法」による任用)。

これまでの非常勤講師は、チャンタソン・インタヴォン(ラオス事情)、星野龍夫(文化史)、竹原茂(語学)、ポーンケオ・チャントマリ(語学)、林幸夫(東南アジア仏教)、飯島明子(文学)、菊池陽子(歴史)、鈴木基義(開発経済)、新谷忠彦(言語学)、小坂隆一(言語学)の各氏である。

なお今年一九九八年度、日本の大学としては初めてラオス国立大学と大学間交流協定を締結。本学からすでに留学

生を送っており、一九九九年からは双方の交換留学が始まる。

### ベトナム語専攻

一九六〇（昭和三十五）年十二月、南ベトナム民族解放戦線成立に始まったベトナム戦争は激しさを加え、一九六五年ついに米軍の北爆開始となる。その北爆開始の前年（東京オリンピック開催の年でもあった）の一九六四（昭和三十九）年、タイ科は「ベトナム語学文学」を加えて、タイ語学文学、ベトナム語学文学、インドシナ事情の三つの学科目をもつインドシナ語学科となった。

これは学生の増員は伴わない改組で、学生定員は従前通り二〇名。学生は入学後タイ語とベトナム語のいずれかを選んで履修することになった。「タイ語に入ったつもりでいたら、急にタイ語とベトナム語のどれかを選べと言われて驚いた」という一期生の証言もあり、この改組は受験生にはあまり徹底していなかったものと見える。専任教官の着任は翌年。初年度のベトナム語は、非常勤講師三根谷徹の肩にかかった。

開設以来の専任教官は、竹内与之助（一九六五―八五・三）、宇根祥夫（一九七五―）、川口健一（一九八四―）、今井昭夫（一九八八―）の四名である。

初代の外国人教師はグエン・カック・カム（一九六七―七三）。この当時はまだ三年間辛抱すれば、専任の外国人教師を迎えられた時代であった。以降、グエン・カオ・ダム（一九七四―七六）、チン・ホ・ホア（一九七七―八〇）、レ・クオック・ヴィン（一九八一―八四）、グエン・ティ・カイン（一九八五―八六）、ツエン・スワン・ルオ



竹内与之助

ン（一九八七―八八）、ホワン・チョン・フィエン（一九八九―九二）、グエン・ヴァン・フェ（一九九二―九四）、ラム・ホン・フォン（一九九五―）となっている。  
初代のグエン・カック・カム以外ほとんどは、現在大学間交流協定を結んでいるハノイ国家大学（旧ハノイ総合大学）から迎えている。

開設以来これまで非常勤講師を務めたのは、ダム・クワン・トゥアン、グエン・ドゥク・ホーエ、ファン・ゴック・ピック、チャン・ベト・ホン、グエン・ホン・クワン、グエン・ディク・ホアン、レー・パン・クイー、ホイーン・トリリー・チャイン、三根谷徹（言語学）、松元洋（語学）、对比地千代子（語学）、真保潤一郎（政治経済論）、藤田勇（政治・経済）、三尾忠志（政治・経済）、木村哲三郎（政治史）、小林慶三（語学）、日隈真澄（語学）、村野勉（経済）、古田元夫（現代史）、桜井由身雄（歴史学）、栗原浩英（現代史）、竹内郁雄（経済）、加藤栄（文学）、春日淳（語学）がいる。

なお、ベトナムでの日本語熱の高まった一九八〇年代より、協定先大学などから毎年三、四名の留学生が日本語・日本文化の研究のために本学に来ており、ベトナム語教官は彼らの大学院進学準備にかなりの時間をさいて協力している。ハノイやホーチミン市へ留学する本学の学生も近年着実に増加している。

#### カンボジア語専攻

カンボジア語専攻は、一九九二（平成四）年にインドネシア・

マレーシア語学科とインドシナ語学科が合併、東南アジア語学科となったとき、フィリピン語、ラオス語と共に加わり、一九九六年より卒業生を出している。四年間体系的にカンボジアのことを学ぶことができる日本で唯一の場である。

坂本恭章（アジア・アフリカ言語文化研究所教授）が併任教授（一九九二―一九六、名誉教授）として、非常勤講師ペン・セタリン（一九九二―）、ネアック・ソック・チョムラン（一九九三―）と共に一期生以下の教育に情熱を傾けた後を、上田広美（言語、一九九七―）、岡田知子（文学、一九九七―）が引き継いでいる。

なおこの間、ニュオン・カン（一九九四―一九六）が外国人任用法（正式には「国立又は公立の大学における外国人教員の任用に関する特別措置法」）による教授として任用された。

開設以来の非常勤講師は、右に挙げたペン・セタリン、ネアック・ソック・チョムランの他、カン・スオン、峰岸真琴（言語学）、友田錫（政治）、天川直子（政治・経済）、川口正樹（語学）、笹川秀夫（文学）、高橋宏明（歴史）、三上直光（語学）、種瀬陽子（東南アジア音楽）、吹抜悠子（歴史）、石澤良昭（歴史）がある。

### ビルマ語専攻

一九四四（昭和十九）年、東京外事専門学校にビルマ科が開設された。一九四二（昭和十七）年、日本軍のヤンゴン進駐の二年後である。同時に開設されたフィリピン科が翌年から学生募集を行うのに対して、このビルマ科は学生募集を行わないまま、一九四九（昭和二十四）年の新制大学発足時に廃止となった。

一九八一（昭和五十六）年、インドシナ語学科に「ビルマ語学文学」講座として加わったビルマ語は、そのビルマ

語の再スタートということになる。ビルマとは、戦後は賠償協定がもつとも早く締結され、経済技術協力、文化交流が進んでいたが、一九七六（昭和五十一）年には、第一回対ビルマ援助国会議が東京で開催されている。このときのビルマ語開設の背景であろう。インドシナ語学科は、ベトナム語を加えた時に増やしていなかった学生定員をこのときは一〇名増やして定員三〇名の学科となった。

専任教官は、奥平龍二（一九八一―）、斎藤照子（一九八二―）と、客員の外国人教師の三名である。専任の外国人教師は、初代のタン・トゥン（一九八四・一〇―一九八七・三）の着任の年を見ても、ベトナム語専攻の場合と同じように、四年目には着任している。その後、スイー・スイー・ウイン（一九八七・一〇―一九九二・三）、トゥン・ミイン（一九九二・四―一九九四・三）、エイ・チョー（一九九四・四―一九九五・三）ドオ・ポ（一九九五・四―一九九七・三）、キン・メイ・ヌエ（一九九七・四―）と続く。

開設以来、出講した非常勤講師には、ティン・アウン、ドオ・キン・イー、テレサ・イケヤ、ナイ・パン・フラ、ティン・ティン・テイ、タン・タン・ミイン、土橋泰子（文学）、田村克巳（文化人類学）、桐生稔（政治経済）、藪司郎（言語学）、大野徹（語学・文学）、田辺寿夫（歴史）、南田みどり（文学）、根本敬（政治史）、土佐桂子（文学・人類学）、原田正美（文学）、高橋昭雄（農村問題）、伊東利勝（東南アジア宗教）、澤田英夫（語学・言語学）、岩城高広（語学）、森祖道、田中教照、石上和敬（以上三名はバリ語・仏教）がいる。

なおビルマ語研究室は、外国人教師を主としてヤンゴン大学歴史学部同歴史研究センター、ヤンゴン経済大学から迎えてきた他、これまで多数の客員研究員を受け入れ、研究交流を行っている。